

「昭和丙子台湾屏東之旅」解説

二〇一八年、和歌山県T市の旧家に伝わる古筆筒の奥から一冊の大学ノートが出てきた。表紙には「昭和丙子臺灣屏東之旅（昭和十一年台湾屏東の旅）」とペン書きされていて、ノートを開けて読んでみたのだが、相当な悪筆のため文字が判別出来ず、わずか一行読むだけでも数分かかる有様であった。このため相当な時間をかけて翻刻を行ったところ、この記録には当時の台湾南部の話題が多数取り上げられていることが判明したことから、遺族の許可を取って出版することとした。私の勝手な願いを聞き入れてくれた遺族の皆様には心より感謝を申し上げますとともに、この記録の来歴及び時代の背景をここに簡潔に記すものとする。

この記録の作者について この旧家に残る位牌で筆者の名前を照合したところ、一九五五年の正月に五十歳で亡くなっていることが判明している。したがって、この記録の筆者は一九〇六年の日露戦争直後に生まれ、大正デモクラシーの時期に青春を送り、三十一歳のときにこの記録を書き、その後悲惨な戦争を経験し、戦後の高度経済成長期を知る前に亡くなったことになる。その他の詳細は不明であるが、この記録から推測出来る筆者の人となりの特徴として次の三点が挙げられる。一つ、彼はとにかく飲み食いが好きであったことである。たとえば、台湾人の友人宅で食べた客家料理の名前などを丁寧に記述していることから、当時の台湾南部の食文化をある程度推測することが出来る。面白いのは、彼の食への興味はスイーツにも及んでおり、たとえば記録に出てくる「バナナクリーム」などはレシピが気になる場所である（現代の台湾料理にはバナナクリームに相当する菓子は存在しない）。菓子里にカレーを入れると存外に旨いかもという考え方は食に対する柔軟な発想を伺わせるし、一方で、満州国皇帝御愛好のプーアル茶（原文では「ポア茶」）を不味いと言い捨て、味の悪いコーヒーに至っては容赦なく罵っているところは、筆者の飲食に対するこだわりがあらわれていると言える。

もう一つ、彼のものの考え方は、総じてリベラルな印象を受けることである。彼は軍隊や放蕩息子を嫌う一方で、台湾人・先住民たちともわけへだてなく接している。支那（現在の中国）や朝鮮をおとしめるくんだりも見られるが、ただ、これはどちらかというとも民族蔑視というより笑い話の類として取り上げている。大正デモクラシーの時期に青春を送った影響があるのだろうが、私にはこの筆者に対してリベラルな印象を受けるのである。

そしてもう一つ、彼はとにかく色街や女遊び、エログロナンセンスに深い関心を示していることである。売春業のことをまるで一大産業のごとく「妓業」と記述し、恆春で色街がないことを知った時に「商機なり」と書くに至っては、筆者の職業はもしかすると置屋組合の役員であったのではないかと思わせるほどだ。女遊びのことについては相当詳しくは、記録に書かれた二つの歌詞からもみてとれる。たとえば、「千里走るような藪の中を…」という歌詞は、お座敷遊びの「虎虎」に他な

らない。この遊びは台湾の英雄・鄭成功を取り上げているが、これは単なる偶然だろうか。あと、「ソレ突けヤレ突けヨヨイノヨイ」は、女性の陰部を棒で突いて遊ぶ見世物「それ突けやれ突け」の歌詞である。この遊びは明治初年に禁止されているが、ノートに歌詞を丁寧に書いているところからすると、筆者はこの遊びの詳細を知っていたと思われる。また、このような遊びが当時の台湾でまだに行われていたことにびっくりしたのだろう、実際、座敷の中を覗き込んだわけではないのに、筆者の感想は「甚だ下品」と書かれていたのである。

当時の和歌山・大阪について 筆者が青春を過ごした和歌山は、当時の日本を代表する大都市の一つだった。工商業の盛んな紀州徳川家の城下町は殷賑を極めていた。当時、経済恐慌は続き、差別が酷く、決して明るい時代ではなかったが、休みになると和歌山の繁華街・ぶらくり丁を闊歩していただろうし、記録からは不老廓や新和歌で遊んだことも確認出来る。不老廓はかつて和歌浦不老橋の傍にあった不老館遊郭のことで、木造三階建の壮麗な建物はすでに取り壊されてしまったが、その跡地にはアートキューブという芸術系複合施設が建てられていて結構賑わっている。また、新和歌とは和歌浦に隣接する新和歌浦のことである。地元では和歌浦と新和歌浦は別個の場所として認識されていて、和歌浦は万葉集に詠まれた伝統ある景勝地である一方、新和歌浦は明治時代末期に開発されたモダンな観光地である。いずれも南海電車と市電を乗り継げば難波から約二時間程度で到着出来る手軽な場所であり、とりわけ新和歌浦は夕陽を観ながら一泊出来る観光地として京阪神に売り込まれていた。また、海草郡役所は現在の和歌山市新生町の古梅記念病院に位置し、この付近には商店街や映画館があった。その他、中華料理店の北京楼は廃業しているが、天王新地は小規模ながらも現存する。

当時の大阪についても少し述べる。大正ロマン・昭和モダン時代の大阪についてはおびただしい文献や研究があるので詳細は割愛するが、和歌山と大阪は直線距離で約六十キロメートルであり、二つの都市をつなぐ南海電車は明治末期にすでに開業していた。当時の南海電車は、新聞の運搬や大阪ミナミのキャバレーやカフェで働く女給のために一部区間で深夜運転を実施しており、夏になると冷房車も併結されていた。和歌山・難波間は一時間につき一本の特急運転があり、所要時間も現在とほとんど変わらなかった。当時の関西ではインターアーバン（都市間輸送）の考え方がすでに浸透していたので、和歌山に住む都市住民が大阪まで出て行くことへの障壁はさして高くはなかった。もちろんその逆もあって、大阪の古書店に行くと当時描かれた新和歌浦や白浜の観光地図が安価に販売されているが、これは当時の大阪人が和歌山観光に興じたということに他ならない。

台湾・屏東について 当時の日本人にとって、台湾とは農業が盛んな物産豊かな島であった。また皇太子裕仁親王（昭和天皇）の台湾訪問や、多くの地名が日本風に改称されたこともあって（「松山」や「高雄」、そして「屏東」はこの時に改称された）、概して好意的に受け入れられていた。もっとも、

一九三一年に台湾中部の霧社で起こった台湾先住民の抗日事件（霧社事件）は暗く大きな影を落としていて、台湾は首狩族の住むおどろおどろしい野蛮の地という偏見も根強く植えつけられていた。

屏東は決して大都市というわけではないが、台湾製糖株式会社と陸軍基地の経済効果は抜群で、比較的早い時期から市制が布かれており、日本屏東会が作成した当時の地図などを照らし合わせると、多くの映画館・料理屋・カフェなどが営業されていたことがわかる。また、その他の記録を照らし合わせた結果、この記録の概略的な記述については概ね正確と思われるが、敷衍してこの記録に書かれている諸事情の詳細についても比較的実態を反映しているものと思われる。

戦後の台湾は戒厳令が布かれ、国民党政府による外省人支配が長い間続いた。一時期西側陣営との関係が途切れ、外貨を稼ぐために悪名高い売春観光が行われた時代も存在したが、一九八七年になってようやく戒厳令も解除され、民主化の進展に伴い、社会の浄化が進められる。同時に台湾先住民やマイノリティに焦点を当てた政策が数多く採用され、二〇一九年、台湾はアジアではじめて同性婚が認められた国となった。

また、当時日本陸軍の兵舎があった屏東市干城町は戦後青島街と改められ、台湾に渡った外省人が居住する眷村としての役割を経て、現在はコーヒーショップの建ち並ぶ瀟洒な一角として知られている。

（令和元（二〇一九）年十二月）